

授与機関名 順天堂大学

学位記番号 甲第 2591 号

Association between prenatal exposure to antidepressants and neonatal morbidity: An analysis of real-world data from a nationwide claims database in Japan

妊娠中の抗うつ薬曝露と新生児合併症との関連 -日本全国規模の保険請求データベースから得られたリアルワールドデータの解析

藤岡 泉 (ふじおか いづみ)

博士 (医学)

論文審査結果の要旨

本研究は、母親の妊娠末期の抗うつ薬曝露と新生児合併症との関連を日本の全国的な保険請求データベースを用いて検討したリアルワールドデータ研究である。

近年、妊娠中のうつ病の罹患頻度は増加しており、妊娠中に抗うつ薬治療を必要とする女性は増加している。しかし妊娠中の薬剤使用における安全性情報は十分でなく、母親が新生児への影響の懸念から妊娠後に抗うつ薬治療を中止し適切な治療を受けられていない可能性がある。

本研究では株式会社 JMDC の保険請求データを用いて母親の分娩前の抗うつ薬処方 of 新生児への影響を検討した。2005 年 1 月から 2019 年 11 月に JMDC に登録された 114,359 の母児ペアのうち分娩前にうつ病の診断名があった母親は 2,892 人、そのうち分娩前 3 カ月に抗うつ薬処方があった曝露群は 352 人 (12.1%)、分娩前 3 カ月に処方のない非曝露群は 2,540 人であった。傾向スコアマッチング後の曝露群 (n=351) と非曝露群 (n=1,052) の比較では、曝露群で新生児集中治療室 (NICU) の入院リスクが増加した (15.7% vs. 9.1%、Odds ratio (OR) 1.9 [95%信頼区間 (CI): 1.3-2.6])。しかし、新生児の長期 NICU 入院 (15 日以上) には差はなかった。

今回の研究結果では、妊娠中の抗うつ薬処方が新生児の NICU 入院増加と関連しているものの重症合併症のリスクは低く、欧米における患者レジストリを用いた先行研究との整合性も高い。一方、未治療や治療を中断したうつ病合併妊娠ではうつ症状の増悪に加えて早産や低出生体重の増加が懸念されている。従って、本研究結果は周産期うつに対して新生児集中治療との連携を行った上で適切なうつ病治療継続を考慮すべきであるということ を明らかにした、臨床的に意義のある研究である。

よって、本論文は博士 (医学) の学位を授与するに値するものと判定した。